

S . Tさん（原告番号2 1）

1 私は、埼玉県の人が集まった、「ゆうりん」開拓団にいました。父は終戦前になくなり、母と5人の兄弟ではたらいっていました。終戦後逃げるとちゅうソ連軍におそわれ、荷物をとられました。次に満州人におそわれ、鉄砲でうたれ、たくさん人が死にました。渡ろうとしていた川は、血でまっかになりました。にげているとき、「のど」がかわいたといったら、母が草の「はっぱ」を取って、『これを長く「かんで」いなさい、』といったのが忘れられません。やっと奉天につき、「しゅうようしょ」(収容所)にはいりました。着るものも一枚、食べ物もなく、寒さと病気で、ばたばたと人が死にました。毎日馬車に「かちかちになった」死体が山とつまれました。このときのことは今でも忘れられません。一番幼い妹が死にました。母も死にました。兄も死にました。すぐ下の妹は満州の人に連れられていってしまいました。二日後、その満州人が来て、妹に会わせてやるというので、ついていったら、売られてしまいました。私は、そのあとはたらかさ、てんてんと売られたのですが、さいごに20才も年上の男性と結婚させられました。

2 昭和50年になってやっと日本へかえられることがわかり、「しんよう」にいた妹と相談して、おばさんに手紙をかきました。日本語をわすれていたので、「さいとう」さんにかいてもらいました。返事は、「帰ってくるな、家もなく、言葉もはなせない」などとかいてありました。こまっていると、「さいとう」さんが、「二人が日本にかえりたがっている」という手紙を埼玉県にかいてくれました。県はそれをすぐに荒川村に送りました。村では二人が生きていた、とあって、村長さんが「ほしょうにん」(保証人)となってくれ、昭和51年9月に妹といっしょに日本にかえってきました。子どもを一人つれてきました。村じゅうでかんげいしてくれました。

ただ、死んだことにされて、妹と二人おはかができていました。びっくりしまし

た。いつも日本に「かえりたい」と「おもって」いましたが、死んでいては「かえれるはず」がありません。ほんとうにがっかりしました。しかし、村の人はしんせつで、しごとや、子どもの「ようちえん」世話をしてもらいました。「日本に帰りたい」という気持ちはいつそうつよくなりました。なお、なにもしないのに、こせきは、村がすぐに「てつづき」をしてくれて、2人とも、生きていたことになりました。一年ほどいて満州に帰りました。

- 3 かえる「じゅんぴ」をはじめました。おっと(夫)が反対でした。かえったら「りこん」されるというのです。しかし、こどもぜんいんがさんせいで、日本にかえることになりました。

しんせきの「みもとほしょうにん」がひつようでした。おばさんにたのむしかなく、また手紙をかいてもらいました。まえよりつよいはんたいでした。しかたがないので、また荒川村に「たのみ」ました。「のうきょう」の「くみあいちょう」をしていた「みやざきさん」からすぐ返事がきました。村や宮崎さんがしよるいは全部つくり、わたしの母の方の「いところ」に「はん」をおさせました。「てつづき」は、すべて、村や、村長さんや、宮崎さんがやってくれました。昭和55年に、夫と子ども4人をつれて、「きこく」しました。それから村のひとから、いろいろとあたたかくしてもらいました。「ちゃわん」や「ふとん」なども持ってきてくれました。仕事や子どもの学校も「せわ」になりました。

- 4 でも、死んだことにされず、妹と二人もっとはやくから、村に「てがみ」がかければ、もっともっと早く帰れたとおもいます。そうすれば、生活保護4万円をもらわずに、生きて行けたと思います。せまい村ですので、生活保護はめだちますし、子どもたちがばかにされるようです。せめて生活保護ではなく生活していきたいです。わたしは、「くに」のいうとおり、満州にいて、「ひどいめ」にあいました。「くに」に「あやまって」ほしいです。「くに」に、荒川村のようになってほしいです。